

【研究主題】

社会の在り方や自らの生き方を追求する子どもの育成

～社会的な見方・考え方を働かせ、「問い」を紡ぐ社会科学学習を通して～

〈第2年次〉

1 研究のねらい

先行き不透明な時代が到来している。予測困難な社会を生き抜くためには、「生きて働く力」「未知の状況に対応する力」「学んだことを人生や社会に生かす力」といった資質・能力の育成が欠かせない。そのような中で、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多面的・多角的に考察（確かな社会認識を得ること）したり、構想（社会認識を土台として未来の社会や自分を描くこと）したりする社会科学学習において、子どもの主体性が発揮される学びの充実がより一層求められている。そこで鍵となるのは、社会的な見方・考え方を働かせる問いの創出である。問いは、子どもが社会的事象を自分ごととして捉え、追求活動を主体的に進める出発点であると同時に、社会的事象をより深く考察し、構想へと導くものだからである。子ども自身が見いだした問いに基づく問題解決的な学習を充実させることで、明確な答えがない課題に対しても、よりよい解決の在り方を他者と協働して問い続け、たくましく未来社会を生き抜こうとする意思を持った子どもの育成を目指したい。

これまで本県が積み上げてきた研究・実践の成果を生かし、子どもが社会的な見方・考え方を働かせ、「問い」を紡ぎながら学び続けることができるような単元の構想について研究を深めていく。子どもが様々な社会的事象に対して切実な問いを持ち、対話を重視して他者と問いを共有しながら課題を粘り強く追求し、思考を広げ、理解を深めていくことができるような学びの先に、期待される資質・能力を身に付けた子どもが育成され则认为、本研究主題を設定した。

〈本研究における「問い」と「問い」を紡ぐ社会科学学習について〉

「問い」とは

子どもに投げ掛ける問い（発問や振り返りの視点）や子どもが心に抱く問い（疑問や予想、意思）、そして子どもと共につくる問い（学習問題）。

「問い」を紡ぐ社会科学学習とは

社会的事象との出会いから様々な問いを持ち、対話によって（問いの共有）その多様さに気づき、分類・整理しながら大きな問い（学習問題）へと深化させる。そして、問いを追求する過程で、対話を積み重ね、考え続けて学習問題を解決していく（＝「問い」を紡ぐ）。このように、「問い」を紡ぎながら進める問題解決的な学習過程を通して、社会的事象に対する思考を広げたり、理解を深めたりする学習。

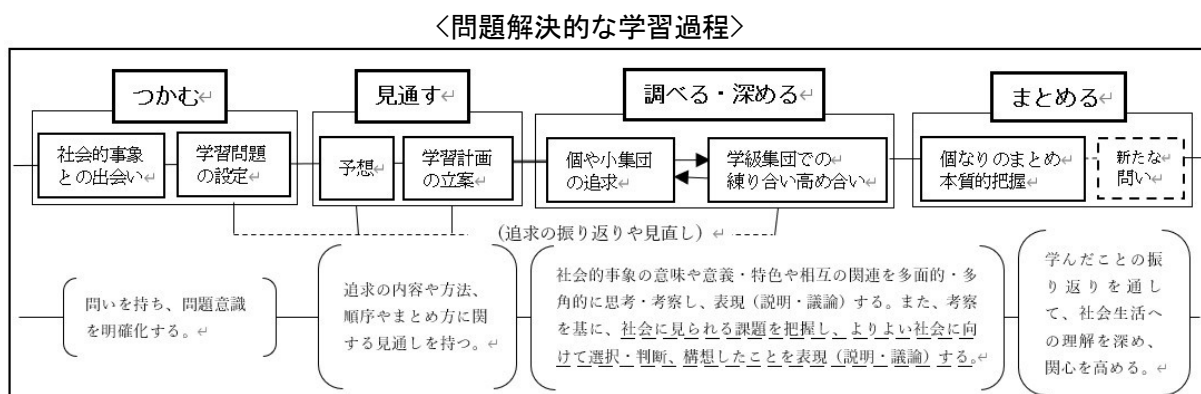
2 研究の視点

(1) 教材開発・単元構成の工夫

- 教材（学習指導要領に示されている内容と子どもを結び付けるための材料）を客観的側面（数値等のデータや地図、年表等）・実感的側面（写真や見学、模擬体験等）・共感的側面（ゲストティーチャー〈以下 GT〉との関わり等）から見直し、切実な「問い」や多様な「問い」が生まれる教材かどうか吟味・検討する。
- 子どもが社会的事象を身近に感じ、社会の在り方や自らの生き方を追求することができるように、次のような視点を踏まえて教材開発を行う。
 - ・工夫や努力、協力など人間の知恵から学ぶことができる人の姿や地域素材の教材化
 - ・情報化や環境問題、防災・安全など、社会の変化に伴って提起される今日的課題や簡単には答えが出ないような問題の教材化
- 子どもの問題意識のつながりや他教科との関連、小・中の系統性を踏まえて単元を構成する。その際、子どもが問題解決への見通しを持ち、社会的な見方・考え方を働かせながら、『問い』を紡ぐ問題解決的な学習過程を構成する。

(2) 学習指導方法の工夫・改善

- 社会の在り方や自らの生き方を追求しようとする資質・能力は、子どもが「問い」を持ち、主体性を発揮しながら調べたり考えたりして適切に表現する問題解決的な学習過程において育成される。そこで、下のように単元を構成して学習を展開し、教師のコーディネートに在り方に焦点を当てて学習指導方法を工夫・改善する。



- ・ **つかむ**場面では、教材提示や学習活動の工夫によって、社会的事象との出会わせ方を大切にする。そして、子どもの「問い」を紡ぎながら単元のねらいに迫ることができる価値ある学習問題を設定する。
- ・ **見通す**場面では、子どもの問いの引き出し方を工夫し、それを分類・整理しながら学習計画を立てさせる。その際、個や小集団での追求の内容や方法、順序やまとめ方を選択させ、見通しを持たせる。
- ・ **調べる・深める**場面では、「学習問題の解決に向かっているか」という視点から、追求の状況を他者と共有させて、振り返りと見直しを大切にしながら協働的に追求させる。また、子どもが追求の成果を根拠にして考えを練り合い高め合うことができるように、問いやコーディネートを工夫して話合いの質を高め、学習問題について多面的・多角的に思考・考察させる。また、学習内容や学習状況によっては、考察したことを基に、社会に見られる課題を把握し、その解決に向かう社会の在り方や自分たちの関わり方を選択・判断し、構想したことを表現（説明・議論）させる。
- ・ **まとめる**場面では、予想したことや多面的・多角的に思考・考察して理解したことを想起させ、学習問題に対する個なりのまとめを書かせる。個々のまとめを共有することで、ねらいとする概念的な知識の獲得につなげ、社会生活への理解を深めたり、関心を高めたりしながら本質的把握に迫る。さらに、そこで生まれた子どもの新たな問いを生かし、「問い」を紡ぎながら学びを継続できるようにコーディネートする。

(3) 評価の工夫

- 社会科日記やワークシートの内容、活用の仕方を工夫したり、評価場面を精選して単元の目標や学習のねらいに即した具体的な評価規準を作成したりして、効果的・効率的な評価を行う。
- 子どもの問いに着目し、子ども自身の学び方や社会的事象に対する思考の広がりや理解の深まりを見取って指導や評価に生かすことで、主体性を発揮しながら学び続け、本質的把握に向かう子どもを育成する。

3 留意事項

- 社会的事象の意味や意義を解釈する、社会的事象の特色や事象相互の関連を説明する、持続可能な社会の形成等の視点から自分の考えを表現・議論するなど、言語活動を充実させる。
- 問題解決的な学習過程のそれぞれの場面で ICT 端末や思考ツールを効果的に活用し、情報を収集し、読み取り、まとめる活動やその成果を友達と共有する活動、学びを振り返る活動などを充実させる。
- 「教師と共に教材開発を行う」「子どもに『問い』を持たせる」「子どもと共に追求する」「子どもの追求を価値づける」「子どもを実社会とつなげる」等、GT を効果的に活用する。